

(様式3)

外国人児童生徒等教育アドバイザー派遣結果報告書

都道府県名	新潟県	市町村名	魚沼市	大学名	
派遣日	令和 6 年 7 月 25 日 (木曜日) 13:00~16:00 (添付資料参照)				
実施方法	※いずれかに○をつけてください。派遣 / 遠隔				
派遣場所					
アドバイザー氏名	広島大学 大学院 人間社会科学研究科 准教授 南浦 涼介 先生				
相談者	魚沼市学校教育課 教育センター				
相談内容	・学校全体での受入れ体制の構築について				
派遣者からの指導助言内容	ことばと文化の多様な子どもたちもいる学校づくり 「支援として対応する」から「学校カリキュラムとして教育する」 1 子どもの捉え方 2 学校のカリキュラムで捉えること ・日本語アプローチ ・多文化・多言語アプローチ ・学校全体アプローチ ・学校外連携アプローチ 3 小規模散在地域の例から考える 4 学校全体アプローチとして、何を誰ができそうか 「つまずき思考」-子どもを欠損的に捉える。問題を個人に起因するものとして考え、解決のために個別の指導・支援を行う。子どもが分からないことやできないことを分かる・できるようにすることに重点を置く。負のスパイラルを生む可能性が高く、必要なリソース（時間、人員、意欲など）が不足しがちになる。 「のびしろ思考」-子どもを資本的に捉える。問題を子どもの周り（社会）のあり方に置き、子どもをめぐる周囲のあり方や発想を変えていく働きかけをする。この思考で正のスパイラルをつくっていくためには、学校全体で取り組む必要がある。 学校は、様々な仕掛けを意図的に設けて子どもの成長を育む場所である。外国につながる子どもたちの伸びもカリキュラムに組み込む必要がある。「できない＝日本語				

	力をつければよい・日本語指導を充実させればよい」との捉え方では不十分。日本語指導だけでなく、学校全体のカリキュラムを通じて、包括的かつ中長期的に育てていく。 ① 日本語アプローチ ・言語に依存しがちな授業の視覚化、操作化、体験化、やさしい日本語化、文脈化 ② 多言語・多文化アプローチ ・複数の言語を積極的に使う経験をすることで認知を伸ばしていく（概念は共通）。 ・複数の言葉と文化に根差したアイデンティティを大切にすること。 ・母語でアクセスできる資料、翻訳機、翻訳された資料の活用、アウトプットする言語の選択、評価方法の工夫など。母語や道具を活用して学ぶことは、将来の自律的な学習にもつながる。 ③ 学校全体アプローチ ・行事・特別活動・学校システムの中に組み込む。子どもの活躍の場をつくり、学校全体の多様性を認める力をつくる。（広島の小学校の例） 学校外連携アプローチ ・外部の NPO やボランティアと連携し、学校だけではなし得ない共生の力を地域全体で育んでいく。 これらのアプローチをパズルピースのように組み合わせながら、学校全体で「差異の承認」と「格差の是正」を見据えた言語と文化のインクルーシブ・カリキュラムを作成する。誰か一人ではなく、さまざまな人が関わることが大切。 少数散在地域の 2 つの事例紹介。日本語指導の体制が充実していなかったにもかかわらず、外国につながる生徒の受け入れが成功し、生徒たちが力を発揮できた理由 ・学校が、外国につながる子どもたちを中心課題として扱ったこと。 ・教職員や地域全体が生徒全員を見守り、支える雰囲気があったこと（多くのステークホルダーの存在）。 体制が整っていないなくても、同じ目的を持って、それぞれが良いと思うことを実践し、「こんなことをやってみたよ」と共有していくやり方＝ノットワーキング 結び目＝knot をつくりながら、柔軟に対応していく また、各自の立場から何ができるかを出し合い、それをまとめてみるのが効果的。実行可能かどうかどうかにとらわれず、理想像を考えてみる。ビジョンを持って進むことが大切。ビジョンを共通し、それぞれができることを試しながら、自分なりに進めていく、それぞれにできることを実行していく。これがパズルのピースのようにくっつき合っかたちをつくっていく。
相談後の方針の変化、今後の取組方針等	これまでの外国につながる生徒に関する打ち合わせでは、日本語指導担当者を中心に課題・問題の共有とそれに対する支援が主な議題だったが、今回の研修を通じて「つまずき思考」に偏っていたことに気づいた。今後は「のびしろ思考」を意識し、ポジティブな視点での話し合いを心掛けたい。 また、学校全体で取り組むことの重要性について、多くの参加者と共通の理解を持てたことは非常に意義深かった。さらに、具体的な 4 つのアプローチや「ノットワーキング」という新しいつながり方について学ぶことで、参加者一人ひとりが自分の立場でできることをイメージできたのではないかと感じている。私自身も、学校外との連携アプローチについて、イメージを膨らませることができた。 また、小・中規模校の少数散在地域の事例も紹介があり、少数の学校には、学校全体での取り組みが行いやすいという強みがあることを知った。このことは、魚沼

(様式 3)

	地域の学校の特性を活かした取り組みの可能性を認識することができて、大変有益だった。
--	---

1 枚にまとめる必要はありませんので詳細に記載願います。

なお、本報告書の内容は、文部科学省ホームページで公開いたします。